

4792

特 13

553

明治十二年五月  
一日版權免許

西洋滑稽  
三笑人

田保抄譯



101025-000-7

特13-553

三笑人 (西洋滑稽)

山田 保 / 抄訳

M12

DBY-0307









滑西 稽洋 三笑人

緒言

此書は佛蘭西にて、開板したる、滑稽借家の奇談を  
譯したる者にして、書中に擧る人名等は、彼國の言  
葉を其儘用うるも、害あきことなれど、西洋の書を  
學ばざる人々は、屢これを操返しても、猶讀み苦し  
き所あらんかと思ひ、其名を甚六又は野呂吉あど  
、改めて、只管婦女子の分り易きやうに物せるな  
り、且原書は長き物語にて、紙數も多分にあれど、其





持13  
553

西洋滑稽 三笑人

第一回

凡そ地球の表面に有る國々は數多にて、人の種類も色々に、  
 分ちばあれど人情と物の道理はかはりなく、笑ふれば  
 樂みて、浮世を渡る滑稽の奇談を爰に解き出すは、歐羅巴洲  
 佛蘭西の都ある、巴里斯の其内に亂舞狂奴といふ町ありて、  
 そが中央に三階作りの貸家あり、其家の下坐敷には齒醫師  
 が住る、其二階には若き三人の男が住る、其内一人は  
 部屋と別にして居り、他の二人は同ト部屋にあり、又此三階  
 には一人の産婆が住る、若し三人の内最も年若なるは、其

中我國の人情に合はせしめて、面白からぬ所は大抵  
 削り去り、成丈興ある所のみを摘譯して、此一冊と  
 なしたるれば、看官其心得にて讀まじし、笑ひも  
 したまひて、日永の鬱を散せられんことを望むに  
 せん、

明治十二年五月

譯者誌



名を甚六といふて、齡二十歳とあり、容貌も左のみ醜くあら  
 ず、性質亦愚鈍あるにあらせ、元來瘦形にて、所謂枯たる柳の  
 ごとく、常に心だての能きもの故、朋友より頼まれざる事、  
 何事に寄らず好んで之を引き受け、絶て他人に逆ふ事なく、  
 折々事を失錯て、人に笑はるゝの外義に欠けざる事はあし、  
 甚六は一の會社に傭はれて、一箇年の給料纔二百圓を得る  
 身あれば、元より藝妓娼妓の遊び、いふまでもなく、割烹店の  
 奢さへあらず、只物事約にぞまたりける、又一人の若き男は  
 其名を野呂吉といひ、年二十三にして、容貌は殊に美しく、恰  
 桃色ある薔薇の花に似たる様ありとも、此男は性



欠

MISSING



らす斯く親父よりの手翰を見れど、いつも返事を出す事も  
なく、日々往來にて知らぬ婦人にまでくだらぬ世辭なさい  
ひけるに、婦人は一目見て醜男なるを嫌へども、其話加減の  
巧みあれば、別に怒もせざ、いつも足を早めて行過ける、或日  
甚六は氣振太に向ひ、甚「ナイ、くお前は先頃己に若ひ情婦の  
世話をする約束ぢやアねへかばん、そりやア忘れねへが、  
先づ己のが餘るくらひになると、お前にも擬ふ積りだがお  
前は一体色情には疎い、そして餘り厚のまし過るから出来  
ねへかも知れねへせ、甚「ナ、馬鹿をいひねへ、時に己のせふ  
いふ譯やら美しひ奴に出會すと、何んだか胸がドキ／＼して



話も出来ぬへわばん「成程初進の内いさうありさうき事よ、  
夫れぢやア先づ醜い婦人に話かけて追々上等の口に取り掛  
んあせい甚そりやア餘りまだるいのよ醜い婦人はどふい  
ふ譯やら先祖から虫が好ねへばん「何んにしる色男は外  
貌が肝心ぞ、そして帽子は少し横にして往來を歩くにも成丈  
意氣な風を見せて、口にい巻煙草でもくわへなせへ」と互に  
興げに話の中へ野呂吉が入來り野呂「お前達は何として居  
るのだ今夜の家主から踊の會に呼れたぢやアねへか、踊の會  
に踊る事と知るべしちつとも早く金の面工でもして古着  
の筭段でもせにやアあるめへばん、とふよ夫が肝心だ

まかし己は別に當もねへから一切爰にお前達に委任状と  
まやせうよ甚「よし」合點だ兎も角野呂公と二人で出掛  
やうせ、といひつ、二人は階子を降りて門口より東西に分  
れて面へ出で行きけり間も無く日も暮ければ氣拔太は頻  
りに二人が歸るを待兼て窓を開きては首さしのべ最早歸  
る刻限だが馬鹿ぶししいもう九時過だらふ一寸時計でも  
見やうオット己の時計はどふに質屋へいつて流れてままつ  
と其時計といへば百合の様な大時計でいあつたが時いな  
かく儲だつたをして親父より貰つて大事にしると云ひ  
とあつちや惜い事とした時に下の齒醫師で時を



附うの併し過刻も一度聞たから又行のもおかしな物よ三  
階の産婆と云やうかイヤ待わの婆の己と滅法交際が善く  
ねいのそれといふのも取揚を度々願まねへかよ何にし  
る當て碎けるだ一番出掛て見やうと三階に昇りて産婆と  
記したる表札の前に子と鈴を鳴せば産婆の懸念な入と思  
ひ大さる聲にて産婆「何に御用で御坐いますかばん」ハ我  
の俸が生れやした産婆「ヤ、ソふですかと嗅烟草を鼻  
の穴に一ばい詰込出來り西洋の嗅煙草とは鼻のそしてお  
子さんの何處にお出ですかばん」左様な俸の今股引の内へ  
入て置ましたか産後の虫氣も梅障氣も無く殊に朝晩の至

071  
のて夫で御坐います夫に我のそふい、譯だか夜るはる  
と脊骨の用方が痒くなるが職にかゝる悪、所で困やすから  
夫を御相談に來やしたのさ産婆「そなた一其事を云に來あ  
まつたのかばん」イヤ至くさういふ譯、も御坐やせんが  
あなだの取揚もなさるから少しの聲、もあるかと思ひや  
してさ産婆「私の醫師探の談ません」へお出なさいと少し  
ハツトすればばん「お婆さんお待ぐやせハ買の外にも御尋  
ね申してへ事があやす夫や別の事で御坐やせんが我  
の金時計が止まりやしたよ此金時計といハ以前三百圓  
で買ま、のにとらういふ譯、止りやした夫故時が分ら



ねへで十方に暮升産婆そんなから時と聞に此夜中私共の鈴  
と鳴したのかへ随分遠慮のあいか方ぢやもういゝ加減に  
してくださいばんそんなら歸り升かふ一寸時計を見ても  
だッせい産婆私の時計の止つてゐますよばんそんなら置時  
計で見てくださいへ産婆それも振が止つてゐる升よばんそん  
なら日時計でも産婆もふ澤山です喧しいといひつゝ婆の  
腹立まされ方一杯にて戸を閉る機會に氣拔太の鼻を少し  
擺こめせバ氣拔太の顔を離めて證やう己の高ひ鼻をつぶ  
しても追出す積りかひとめめにあはせやアがつた併し己の  
鼻の左程高もねへが何にしても此仕返しをえてやらうと

暫時手を組考がへしが氣拔太の點頭ながら額に手を當て  
こいつは面白い考がへぶ直に取掛らんと己が懐中より小  
刀を取出し産婆の入口に張付たる表札を引ばづし忽地下  
に降りて又齒醫師の表札をも引ばづし其跡へ産婆の表札  
を張付再び三階に昇りて齒醫師の表札を産婆の入口へ張  
付一人笑ひて思ふやうかう取換て置けば明日の吃と面白  
みがあるに違ひあしき時にもふ二人が歸る時刻だと下に  
降りて我部屋に入らんとする時靴音の階子の下に聞へけ  
れば誰だかと思ひしに兼てさる甚六に例の通り鼻歌  
を歌ひながらに戻りけり



其積りよ時に外の店子にも己扱と同様に親切にするの  
 か知らん其處が分らねへ何しろあの婦さんのもう四十七  
 八ぶらうが滅法にめかして居から吃と若ひ者には脆から  
 うと思ふせ夫に此頃己に少し氣があるやうすぶから己  
 もあの婦さんを見ると爰ぞと思つて氣取て見せるに甚馬  
 鹿をいひねへ氣取た所が迎も書餅だぼん「なんの己から大  
 丈夫だお前の様ゑ不意氣な代物ぢやア當てにあらねい 甚六  
 「飽棒め己の不意氣よりお前の面の實に小穢ねへまぶしも  
 野呂公の方が太ても見所があるせぼん「十二面で色をま  
 ものか野呂公の腹の随分荷だせ 甚六「そりやア兎も角あの婦さ

んが若しお前にばかり氣があるから野呂公や己にまで親  
 切にする譯がねへぼん「分らねへ事をいふせお前や野  
 呂公己の友達だからお前達にも親切にすりやア己が愧  
 ぶと思つて居るのよ 甚「肚胸のいひ事をいふせそんなら家  
 賃のといこほりを催促しねへも己の爲だどぬかすだらう  
 ハ、ア一時にお前何時でも人に噺をするに大そふな螺  
 を吹過るせぼん「そうよ其處が肝心だまんざらでもねへそ  
 の證據といふのくらひ螺を吹ておひたあう今夜招か  
 れたんだ其時の言葉にも是非お出ください吃と待て居り  
 升と云たちやアねへか 甚併しあの婦さんがさう云たに



第二回

氣被太甚六の二人は共に建立て己が部屋に入り甚六の前  
 の下に何をして居たのだばん「ナニサ時が分らぬへから産  
 婆の部屋へ行て聞た所が時も教へぬへでお負に己の鼻へ  
 紙を付やががの餘り悪いいら徒らをしてやつたの上  
 今に分るから夫よ及肝必赤黒の着物の面玉が出来たか甚  
 六丸で大それと是非とも借さけりやアならぬへに友達の  
 生僧留守よばん「そのいつのまらぬへ併し野郎的のどよだ  
 か知らんて此奴も同十様に金の面玉が出来ぬへ時はやア  
 今夜持れた時に掛る事が出来ぬい甚六さうよ惜ものよ

時に家主の婿さんのす的もぬへ金持たさうだそして此家  
 ばかりぢやアねへ巴里斯の大通りにも何軒どな家を持て  
 居るさうだ其内にも自分の住でる家なんぞの立派なもの  
 でとんる隔を催しても差支がぬへとよ今夜己達も是非  
 行て見てへのど一休あの婿さんの外の家主と違て欲がね  
 へせ店子に親切で家賃がどいこはつても催促のまの字  
 も云やアしねへ適々家賃と拂ひあ行て態をお出でお氣の毒  
 だ決して家賃の急ぎませぬ若ひお方は金の入るものだ  
 案の急ぎに及びませぬといふ所が難有賃は珍しや女  
 よ其處で己の外の店へ引越す了簡のねへせばん「よ己も



其積りよ時に外の店子にも己杯と同様に親切にするの  
 か知らん其處が分らねへ何しろあの婦さんのもう四十七  
 八ぶらうが滅法にめかして居から吃と若ひ者にハ脆から  
 うと思ふせ夫に此頃ハ己に少し氣があるやうすぶから己  
 もあの婦さんを見ると爰ぞと思つて氣取て見せるハ甚馬  
 鹿をいひねへ氣取た所が迎も晝餅だぼん「なんの己から大  
 丈夫だお前の様ゑ不意氣な代物ぢやア當てにハあらねハ甚六  
 「筥棒め己の不意氣よりお前の面ハ實に小穢ねへまぶしも  
 野呂公の方が太ても見所があるせぼん「ナニ面で色をよる  
 ものか野呂公の腹ハ随分荷だせ甚六「そりやア兎も角あの婦さ

んが若しお前にばかり氣があるから野呂公や己にまで親  
 切にする譯だねへぼん「ム、分らねへ事をいふせお前や野  
 呂公ハ己の友達だからお前達にも親切にすりやア己が悦  
 ぶと思つて居るのよ甚肚胸のいひ事をいふせそんなら家  
 賃のどいこほりを催促しねへも己の爲だとぬかすだらう  
 ハ、ア一時にお前の何時でも人に漸をするに大そふな螺  
 を吹過るせぼん「そうよ其處が肝心だまんさらでもねへそ  
 の證據といふハあのくらハ螺を吹ておひたあふ今夜招か  
 れたんだ其時の言葉にも是非お出ください屹と待て居り  
 升と云たちやアねへか甚併しあの婦さんがさう云たにハ



違ねへがまさう己達おれたちが黒くろの着物きものがねへどの思ふめい招まねかに  
 を用もちゆる時とき杯さかの黒くろの着物きものをしてもし行いなけりやアあの嬌こよひさ  
 んが怒おこるかも知しれねへ夫それに正直しんちやうな女おんなだから食く事じの設しためあ  
 るに違ちがねへ所ところで己おれの股引はかばかと手袋てぶくろより外ほかねへのだばん己おれ  
 のチヨツキと襟飾えりかざりざりて野呂吉のろきよの上衣うわぎだけか實じつに困こまつた  
 なアチヤ時ときに野呂公のろこうの足音あしおとがする世金よねの面工めんくが出来できたか  
 も知しれねへと二人ふたり啾しゅうの其中そのなかへ野呂吉のろきよの入り来きたり野呂のろイヤ  
 甚じ公こうのもう歸かへつたな己おれア夕飯ゆふめしを喰くてから丁度ていど二里にりも歩あ  
 いたらうよそれですつかり草臥くさばたたもうとふする事ことも出来でき  
 ねへばんさうか併あし金の算段さんだんが付ついたら歩あいたのも無益むえきに

やアさうねい野呂のろム、さうよ己おれの懸意けんいを所ところのそんな歩あい  
 て見たみたが誰たれでも貸かにの貸かのよばんといつら奇妙きせうだ野呂のろ併あ  
 し金かねがねへそふだからとふにもこふにも仕方しやうがねへ所ところで  
 幸さい以い己おれの甥おとこの事ことが胸むねに浮うんだ是こりやア身上しんじやうが滅法めつぽう界かいい  
 から大丈だいじやう夫ぶと思おもつてそこへ行いくと折おも能よく丁度ていど出掛でかけるとこ  
 よ甚じ「そこで金かねを貸かたのろ野呂のろ」ア待まちよそこで己おれが二十四  
 五圓ごえんでい、から金かねを急いそぎに貸かて呉くれると頼たのんだ所ところが彼奴まやつのい  
 ふにのそりやア容易やす御用ごようだ三十圓さんじゅうえんだけ御用ごよう達たつとい、や  
 したばんといつら妙めうだ何なにしろ其金そのかねを早はやく見みせねへ野呂のろ  
 ア待まちせくめへく其時そのとき又甥またおとこのいふにやア今日けふのいけねい



からもう四五日も過らぬにききせへといふらこいつ  
も矢張りいけねへのよばん「あんだとあんなまり人を馬鹿にす  
るせ出来なけりやア出来ねへといやアいひのにつまらね  
へ長断で時間が減法過たせ野呂「さうお怒んあさんな仕方  
がねへもし其時甥に金がありやア貸ても呉たんだばん「さ  
うお前はいふけれど五六日も立て行て見なせい屹と留守  
だどぬかすせ甚えて見りやア計策も尽た様る形ど三人  
の共に溜息付て暫時の咄もせざりしが突然氣振太は聲を  
張上げばん「イヨ一奇妙くくどふと計畧を捨り出しやした  
せ迎もこふいふ考へは唐の公明にも覺束ねへ何は兎もあ

れ二人とも祝ひふまへ淨めたまへだ先今夜の會はきめこ  
く野呂「そりやア又とふいふ考へだばん「ム、三人一所と  
いふ譯にやアいかねへが先己の考へにやア一人も揃つた  
着物と持ねへせ其處で三人のを一ツに集りやア一揃出來  
るだらふ先甚六が股引と手袋よお前は上衣で己がチヨッキ  
と襟飾よ、こいつを一人がツツ着込で先陳をやつけ向へ行  
たら菓子や氷を喰込で二時間づゝの交代とやらかし換く  
に同様のものを着替ちやア行のよ夫に僅三四下と来て居る  
から譯もねへ断だ野呂「そりやア何だか氣まりが悪いせ甚  
「併し面白い考へだ何でもア行れりやアいひぢやアねへ



かばん「さうよ併し一番終に當る奴は運がいひせ夜食夜是は  
 三時過にありつくだらう其所でいはずと知れた終は  
 發起人の己どやうかそふ野呂「さうはいかねへばん「そんな  
 ら恨このねへ様に闇取とやらかさう甚「こいつはい、思ひ  
 付だもう何しろ十時半だせ遅も十一時には先へ一人出掛  
 るとしやう「此時氣拔太は一枚の紙と取出し三ツに切て一  
 二三の番號を記し是を堅く捻りて冠の内へ入れ置きばん  
 「お前達は眼を閉て是を取なせいといへば二人は手早く冠  
 の内へ手を入れ闇を取り開き見て甚「ヤア己が一番だ野呂  
 「ナニ己ハ二番かばん「しめた己は三番だ併しこりやア全く

運がいひのだ夜食とは難有爰が残りものに福といふやつ  
 よ野呂「兎も角甚六が一番ぞ早く支度をやらかして行がよ  
 かふうといひつ、己が上衣を取出し氣拔太甚六もナヨッキ  
 股引手袋と持來り手早く甚六に支度を調へさせしに野呂  
 吉の上衣あれば丸で大風に衣といふやうな風体あるを二  
 人は見て笑ひを忍び暫時言葉もなかりしが風が持來る遠  
 寺の鐘は今正しく十一時を報たれば野呂吉の甚六に向ひ  
 野呂「早く行ねへそして菓子や氷をやらかしら一時にや  
 ア屹と歸りあせへ甚「ナットよし、約束違へはまねへが  
 もし家主の嬢さんがあせお前方の一所に來ねいんだとい



かばん「さうよ併し一番終に當る奴は運がいひせ夜食是は  
 三時過なり出にありつくだらう其所でいはずと知れた終は  
 發起人の己どやふかそふ野呂「さうはいかねへばん「そんな  
 ら恨このねへ様に闊取とやらかさう甚「こいつはい、思ひ  
 付だもう何しろ十時半だせ遅も十一時には先へ一人出掛  
 るとしやう「此時氣拔太は一枚の紙と取出し三ツに切て一  
 二三の番號を記し是を堅く捻りて冠の内へ入れ置きばん  
 「お前達は眼を閉て是を取なせいといへば二人は手早く冠  
 の内へ手を入れ圖を取り開き見て甚「ヤア己が一番だ野呂  
 「ナニ己ハ二番かばん「しめた己は三番だ併しこりやア全く

運がいひのだ夜食とは難有爰が残りものに福といふやつ  
 よ野呂「兎も角甚六が一番ぶ早く支度をやらかして行がよ  
 かどうといひつ、己が上衣を取出し氣拔太甚六も「ヨッキ  
 股引手袋と持來り手早く甚六に支度を調へさせしに野呂  
 吉の上衣あれば丸で大風に衣といふやうな風体あるを二  
 人は見て笑ひを忍び暫時言葉もなかりしが風が持來る鐘  
 寺の鐘は今正しく十一時を報たれば野呂吉の甚六に向ひ  
 野呂「早く行ねへそして菓子や氷をやらかしら一時にや  
 ア屹と歸りあせへ甚「ナットよし「約束違へはまねへが  
 もし家主の嬢さんがあせお前方の一所に來ねいんだとい



つたらどらえやうばん「さうよ二人は跡かゝ直に参り升が  
は存トの通り馬車が拂底ぶから夫で手間取のでは坐やせ  
うといつて置ねへ」と聞て甚六の點頭つ、階子を降りて家  
主の許をさしてぞ急ぎける

第三回

凡そ世に守銭奴といはる、者多くは貸家を作りて其店賃  
を賣り貧しき者と見る時は僅かの金に高利を食り他を憐  
むの情無きは何れの土地にも多かるに此家の主人は婦に  
て齡は五十路に近けれども最健康に暮せるは人を憐むの  
情に愛て神の恵もありしあらん常に貧しき者には金銀衣

類を施し殊に店子ども勞りて折々は物杯送り店賃の催促  
は絶て爲そ事おし以前夫存生の時は材木を商ひて巨萬の  
金を貯へしかば今となりても年々に貸金の利息許りにて  
二萬圓も得る程あれば家の作りも最廣やかにて下女下男  
も多く遣ひて日々華美にぞ暮せるは實に有福とは知られ  
たり其内に一人の娘ありければ母の寵愛事大方ならせ日  
に蝶よ花よと育てければ娘は最虚弱にて稽古事さへ手  
に付ず終日一ト間に閉籠りて退屈にぞ見へにける或日母  
の娘を見て思ふやう日々に斯して居る時の氣鬱の病に掛  
ふんかど苦しき胸をさで落し娘に向ひて問けるやう母「お



君よ汝のもう十七で嫁盛だが何處へも縁付氣のないかお  
 きみ「ハイお母さん私しや劇場を見たりはしい着物を着る  
 のが楽しみでそがお嫁にでもいつたら最樂みがわり升か  
 へ母「夫の又どんきに樂しとか知れないよまかし汝の誰ぞ  
 能いと思ふ男があるかへおきみ「別に誰もありませんよ母  
 「そんなから私が似合ひな婿さんを選んであげやうおきみ「私  
 しや美しひのが能う御坐い升よ母「それ誰でも當り前ぶ  
 がお前が手を引れてゐるいても皆が讚やうお婿さんを取  
 て遣ふいと暫時考へしが又娘に向ひお前春吉さんを何  
 と思ひだおきみ「あの人の能御坐い升ねへ母「さうさ年も二

十二三位で身代もよし家柄もよいからお前が嫁にあると  
 自然上等お方と交際も出来るよおきみ「それぢやア「あの入  
 にまたいねへと親子二人が心の内に悦びつゝ、其後彼春吉  
 が許へ人を持ていひ入れしに春吉も悦びて忽地相談調ひ  
 間もあく婚姻も終りて後二ヶ年も過ぎければ今宵の踊を  
 母の家にて催せし事と知るべし斯て此日も暮果て夜の十  
 一時にありければ諸方より入り来る婦人の愛をはれとぞ  
 飾ひたれば坐中いいと賑かにして美しく四季に詠む  
 る其花と一時に見ふる心地あり此時甚六の入來りて此形  
 容を見殊に色採たる燭臺にて晝中の如く燈りければ氣振





三十一



三十一



に取れて「さう」と主人は見つて傍に寄り主人「甚六さん今晚  
 の能くお出くばさいました。そして跡のお二人さん、甚六へ  
 い直に跡より参り升が多分馬車が間に合あいで座や  
 せう主人「チャ近いのに馬車でお出ですか。ホント今日の人  
 の集るのが遅い事あの私の婿も娘も未だ見へませぬ。甚六  
 やうさ當時の流行だから是も馬車があいので座やせう  
 主人「ナ、婿の自分の馬車があり升がえりし十二時過に  
 ならあけりやア。いひが甚六左様で座すか時に私の友達も  
 色よく用があり升し夫に馬車が間に合あいで多分遅くあり  
 やせう主人「夫の此氣の毎様えかしあきたり今晚踊が出ま

せうねへ甚六「ハイ踊の大好物です。かゝいくらでも踊ますと  
 いふ内表に馬車の音が聞へければ主人の走り出でしに娘  
 と婿おれば大悦にて二階へ誘引挨拶も終て坐も定まりけ  
 る。甚六の傍に居合せたる妻君と共に踊をど始めり此妻  
 君の容貌の美しけをども外貌に構ぬ人に見へ甚六の見苦  
 しき衣服に比ぶれば丁度釣合も能きゆゑ甚六の得意にあ  
 りて踊けるに元より瘦男にて野呂吉の上衣あれば自づと  
 脊中に風が入り幌の如くに脹けると見物しる人よく是  
 を見て小聲にいふ様「娘客「あの人をお見なさひか飛度には  
 中が脹れ升よ。今一人の娘「あれは衣服ぢやアありません袋



でさアね娘客「さうですわね丸で脊中へ風船でも仕掛た様  
 です今に天井へ飛揚るかも知れませんが杯と咄すに甚六  
 の其様子を見て己を讀るからんと益得意にあり續て踊し  
 かね見物の又小聲にて娘客「あの袋が又踊升よマアは覽な  
 さい面白うは坐い升ねへと多くの見物が小聲にいひしか  
 ば終に甚六の耳にも入て腹立しくや思ひけん踊を止て足  
 早に人の影にぞ入にけり此時主人の甚六が傍に寄り主人  
 「お勞でせう今に私の娘も踊升から其時又御一所に甚へイ  
 畏まりましたと此二人の咄を聞より婿の頼て妻の傍によ  
 り婿「お君やお前もし彼所に居る袋が一所に踊うといつた

らいやだといひなよおきぞ「アイどこにそんる人が居升へ  
 婿「お前彼處の窓に居る人さとして窓に下ッてゐる切で顔  
 を隠して何か喰て居らねせお前の母さんいあんな人を  
 呼のだねへおきみ「あれですかあれの店子ですよと咄の中  
 へ甚六の口をふさぐ「お君の傍に寄り添御新造さん私と  
 一所に踊てくださいいあるおきみ「私今晚勞て居升から御免  
 を蒙ませう甚「チャお勞どの浦山しい併し少しのお勞あら  
 踊と治り升からは是非御一所にといひつゝ手を取んとする  
 ゆゑ婿の見兼ねて甚六に向ひ婿「今聞升れば妻がいやだとま  
 うすを是非踊とおツまやるの無理でいありませんかもし



妻よりお断りまうして御不足なら私も共々お断りをまう  
 しませう甚「イ、エ決して夫に及ませんといひつ、主下の  
 傍へ行き只今お聞の通り御亭主に邪魔を致されました主  
 人「夫のお氣の毒な事です私より今一度娘にまうしませう  
 と主人の母の娘に向ひてナせお前の彼人ど一所に踊るい  
 かい餘程面白人だよおきみ「いやですわへ母さん御覽さ  
 いよあの人の着物といへばぶくくして踊て居る内に脱  
 てまいますアねそして皆が袋だくといふら私  
 いやですよ又母さんのおせあんな人を呼だんです主人の  
 母「ナニそんな事をいふ物ぢやアあ何しろお前一ツ踊よ

皆さんもお前の踊をお待兼ねだねおきみ「私彼所に居る子ど  
 一所に踊て今の袋に見せてやるわと立上り一人の娘を誘  
 引て踊を始しかば甚六の面當にする事と悟り口小言をい  
 ひつ、此場を去りて次の坐敷に行拳の如き氷の塊を口に  
 押込挨拶もせず階子を降り我家をさして戻けり斯て氣  
 抜「太野呂吉の二人の甚六の噂に時移て互に興ありげに咄  
 の中へ甚六は階子を昇りて我部屋に戻しかば二人の見て  
 思はず悦び野呂「ア噂すると影といふ奴よ滅法お前に  
 ちヤア早かつた未だ十四五分前だせばん「チイ時に踊の面  
 白くなかつたか甚「ム、餘り面白もあかつたお負に上衣が



お笑ひので實に外聞が悪うつた己が踊と見物の奴等が少  
 スく笑ヤアがつて己の事を袋の中にへいつて居るの今  
 に踊て居る内にヤア上衣が脱てしまふの何のとぬかしやア  
 がつて實に氣色が悪かつた夫も男も女も角女が笑ヤア  
 がるから猶更よばんそれでも菓子澤山喰らう甚ムウか  
 すてらか羊羹もいらい、が万十のふかし立に氷よばん夫の  
 い、が跡で夜食が出さうか甚さうよ夜食はあるかも知れ  
 ねへがお前の分り多分ねいさうぶ野呂そんな事ハ心配に  
 やア及ばねへ甚公早く着物を脱ねへか己が是からいかな  
 くつちやアあらねへ見や其着物を己が着と立派に見へる

ハ杯といふ内甚六の手早く着物を脱捨る傍より野呂吉の  
 其着物を着換ながら野呂「ナイ氣抜太何時に踊らうかばん  
 」そりやア約束通りよ野呂時に己の肥て居るせいか股引が  
 窮屈で漸どはいたせ丸で足へ張付た様だ跡がむまくいけ  
 ばいひが甚我慢をまねへどふせむまくいひかねへは野呂  
 何しろ此着物で無つちやア行れねへら仕方がねへ着た  
 事ア着たが實に苦しいせ其内馴たらよからうばん「ソス  
 いはずと早く行ねへとして三時にヤア屹と歸んだせ野呂  
 」「マアそんな事をいはずと待ていやむまくい行やア夜食も喰  
 て来むといひつ、股引にて股の痛さを堪えがら顔を離て



階子を降り兎の如く一足飛に走つ、家主が宅に至りければ少も遠慮なく踊の席に入り主人の前に進て今宵の禮をを述にける主人「たいさう遅うは座いまして先尅からお待まうして居ましたとして氣拔太さんも一所でせうねへ野呂「へいあれの只今馬車に金を拂て戻やしよ一体あの男の元私の召仕の様あものであり升が生質横着者で困きりやすいつも主人へ差上る家賃を彼に持して出し升と竟に肩た事がないとか夫故退く嵩ましたが決て私を悪く思てくだせへやすき主人「そんな事い兎も角も今夜の踊てくぶさるぶらうねへ野呂「へい幾時でもやつけやす主人「夫の能

座ひ升そんから彼處に居る若いお方の一度も踊か出ませんあらわのお方と一所に踊て下さい野呂「へい畏りやしたと立上れば主人の跡にて婿に向ひあの店子のお氣に障り升まい前の袋どの大違さ婿左様さあれの袋の中にこそ居ませんが股引の窮迫事丸で粘で張付さ様です主人「お前さんの何かしら人のあらをおいひぶねへ婿「なにさういふ譯でいありませんマア彼人とは覺あさい實に窮迫らしひの歩行のを見ても知れ升あれでも踊積かまらん主人「併しあの人は踊の能き升よ世間でも評判さ婿「さうですか何しろ粘付股引の踊と見てやりませうと咄の内願て



野呂吉は娘と共に踊しが股引の窮迫さに小股に足を曳く  
 はね廻れば見物の娘は是を見て娘客の人の踊は丸で役  
 者の様ですねへ男客奴のは奇妙な踊ぶ乾と以前の芝居の  
 べい〜かも知れねへ杯と咄の内野呂吉の草臥たると見  
 へ一ト休したるに傍に居たる若き男の咄を聞ば男「チイ今  
 夜は食事の設があらうか今一人の男、立派なのが出る  
 さうだ男」どふして夫を知て居るんだ今一人の男「あせとい  
 つたつて主人が己の叔母にいふにやア餘り菓子をとんど  
 喰ちどいつたもの」斯二人の咄と野呂吉は聞て一人點頭己  
 もそんなから菓子を抑へやう、イロフ酒を持出したぞ酒は幾

等呑でも夜食の邪魔にやアなふねへ何にしろ難有今一ツ  
 此勢で踊てやらうと再び踊ければ多くの見物は堪もあり  
 笑ふもありて最賑ひける野呂吉の股引の細にも構はず漸  
 々踊が身に入て大股にはね廻れば如何しうりけんピリ〜  
 と音して股引は前より後の方に破れしに後の破目よりは  
 縞緋のたぐまりが飛出しブ〜下りたるも知らを夢中  
 にありて踊しに又も前より黒く指染て破たる下股引がチ  
 ラ〜見へしかば見物はドット笑ひ出し腹を抱ゆるもあ  
 り婦人は扇を顔に當て笑ひと隠もあり中にはさまり兼て  
 此席を外もありしに野呂吉は何の氣も付も猶も踊に身を



入しかば主人度見兼て野呂吉の傍に寄小聲にいふやう主人「お前さんは客に前の物やお尻を見せる積ですかへ野呂「なんですと主人「マアお見なさいといひつ、股引の股を指させば野呂吉はソコ風の股に入るに氣が付て見れぬ種々の垢染たるもの、飛出せしかば歎あき顔色にてナンザいめいましい是で皆あが笑ふのかお負に小穢物が飛出しやアがつた主人「あせあなたいそんな細い股引をお拵なすつた野呂「私のは是が立派と思ひやしてさ主人「併し只今の様を事がありましたしての餘り立派でもありませんねへ野呂「どが踊に差支のありやせん主人「成程さうでいあり升が種

見たくもかい物が澤山見へましたよ野呂「そんな物が幾許見へても差支のありやすめへ主人「あなた夫でも皆あが笑もするし夫に細君達と踊に不都合でさアね野呂「左様は是の閉口致しやしたもう私のお暇とやりやせう實はつまらねへど口小言をいひつ、戻らんとせしが夜食に心や残りけん再び立戻りしに又もや多の見物の野呂吉を見て笑ひければ是非あく此場を立ち去けり

第四回

甚六の已に眠に就たれど氣拔太の野呂吉の歸りを待て折く門口へ出ての詠め入ての溜息つひて居たる所へ野呂吉



が戻りければ氣拔太の悦びでぼん「イヤ、野呂公か早かつた今しが二時半を報ばかりよ心持でも悪かつたのか野呂「ナ、病氣でもあんでもねへが嘸お前が待どほだらふと思つてよ夫にあの嬌さんがいやな眼元をしちやア止るけれどそりやア朋友にやアけへられねへからぼん「ムマクいふせどふでもいひわ早く其着物を脱でよこしねへなそして夜食の出しさうか野呂「どぶぶの知らねへ己アそんなまみつたれ事氣が付ねへぼん「ナ、夫ぢやアお前喰てままつたのぢやアねへか野呂馬鹿「いひねへ何しろ是を着換て早く行きねへと脱たる着物を投出せば氣拔太の手

に取ばん「己アお前の様に肥ぢやアいねいからどれも樂にはいるといひつ、股引の破たるを見て驚き「コリヤアどふしたのだ大變な事をしやアがつたな野呂「ム、夫か何も己が態としたといふ譯ぢやアわへ實のそんな番狂せで早く歸つたのよぼん「とふと白狀に及んだな野呂「お前のいつをばいて行積りかぼん「馬鹿「いひねへけふの上等の客も居るのにこのさまで行れるものか是から門番の妻君に縫て貰うのよ野呂「そいつのむめへ考へぶ彼には屹と縫るせあいつの亭主の靴職だものぼん「それぢやアさうしやう是から門番を起すのだと氣拔太の階子を降りて門番の入



口に行き戸を叩けば門番の妻「誰ですへ今時分ぼん「イヤ妻  
 君でもか實の折逸てお頼がありやす親父「今時分何用がわ  
 るのだ妻の寐巻姿を見に来たのぢやアねへかぼん「親父さ  
 ん我のお前の妻君にどふのこふのといふ譯で来たのぢやア  
 ねへ今夜の家主から呼れた所が今股引へかざざきをしや  
 しよから上手なお前に縫てお貰いまうしに来たんです親  
 父「さういふのは氣拔太さんか己ア縫事あつ若い時分は瀬  
 戸物でも縫よものだドレやつてあげやう妻「お前さん「ア  
 寐てお出で私が一寸縫てあげやうといひつ、蠟燭に火を  
 点し針と糸とを持來り寐巻の儘にて戸を開けば氣拔太は

悦びて内に飛入り直に後向となつて上衣をまくり尻を出  
 せば妻君の驚き「妻「いやですねへ何をお見せなさるのだへ  
 ぼん「股引の尻が破たのだから其處を縫てください妻「私  
 生てから今迄こんる所を縫た事ありません夫に親父が  
 見ると怒升よぼん「靜にしておくんあせへ親又さんの眠て  
 居るだらう妻「夫のさうと針をさそふかと思つて心配です  
 よ夫に下ばさがいからあふあひものさぼん「下ばさあぞ  
 の入らねいもんですまさかの時にやア急に間に合やせん  
 妻「いやですねへ私の亭主の通常二枚づ、はいて居升よぼ  
 ん「チ、イタ、く尻ぺよと縫ていけません妻「さうでもね



へさわりましたたかい成程お尻も一所に縫ての脱時に困り  
 升ねへ此二人の嘸に親父の眼を覺し親父「あんだ恐しひ所  
 を縫せ丸で醫者が灌腸でも玄やアしめいしさういふ譯な  
 らお前に縫せるのぢやアねへのドレ己が縫てやらふと靴  
 に用ゆる針と糸を持來り妻君を脇へ追遣て氣拔太の傍に  
 よればばん「コリヤア難有お前さんあふ大丈夫に縫やせう  
 親父「大丈夫とも夫の請合ぶ外が切るとも縫目の切ねへば  
 ん「そりやア奇妙だと暫時待内出來上れば氣拔太の頼に  
 を述飛が如くに家主の許をさしてぞ急ぎけり斯て家主の  
 主人の氣拔太の入り來るを見て出迎ひ主人「チャク能お

出ささいました馬車屋に賃錢をお拂ひさるに今迄お手  
 間の取升まいにそしてあきたのお仲間のもうお歸りにな  
 りましたよばん「へエあんの事だか能分りやせんが實の我  
 の外の踊に招かれやして竟遅くありやした主人「ア、そふ  
 でそかといひつ、主人の婿の傍に寄り小聲にてあの人  
 袋でもなし股引も張付てのありませんで能風でせう此時  
 婿の苦笑としながふ至極能風です主人「あの人に一つ踊し  
 て見ませう婿「左様さ私からさうまふして見ませうと氣拔  
 太の前に行きあさふ一つ踊てくださいばん「今夜の外で二  
 三軒踊て参りやして草臥ており升から御免を蒙りやと婿



「さうでよか時におきたの甚六野呂吉とかいふお二人のお仲間ですか ぼん「左様でよ三人とも此方の店子で御坐いやと婿「あのお二人のお早くお歸りにありましよ其内肥たお方の御存ですかあの人のお股引の丸で張付たやうで踊らちに破ましよが實にお笑もものをはいており升「ぼん「夫の面白ふ御坐いやしたらう私にそんな男の一向存せんがあせそんな細い股引をはいてゐるのでせう婿「左様さ自体の作がいひので夫を見せやうといふ積りかも知れませんが今一人の大連でブクくした上衣を着て丸で袋の内に居るやうでありましたがありやア二人とも自分ののであり

升「まいよ ぼん「成程そりやア甚六とかいふ男をせうがあれの瘦形ぶのらいつか肥た時の要心に天ふりに拵へるとかいふ事です婿「そりやアさうとおの二人の裁縫職でも取換さら丁度能からうと思ひ升よ時ああたの先刻のら立てお出でお草臥でせうまあ腰をお掛なさい ぼん「へい難有御坐いやそと腰を掛しに俄に大聲を上ア痛いて、、、誰ぞ爰へ針でも落ておいよと見へるの婿「夫の不思議です誰も其處らへ針の落し升「まいといはれて氣拔太の心付腹の内と思ふやうコイツハ何でも門番の細君に尻を縫せた遺恨であの親父めが針と一本入れておゐたに違へぬへ併



し爰で尻をまくつて見る譯にも行ずひせいに合せやア  
 がつたぢア婿「能見ましよが何もありませんから先お掛あ  
 さいばん「へい私り立てゐる方が勝手に御坐いやす一ト廻  
 女中衆の方を廻て参りやせう斯て四時ともありければ主  
 人の嫌の客に向ひて主人「もう御膳が出来ました皆さん次  
 へお出ください男方や婦人を別にしてと興がありませ  
 んかゝは一所に致しましたサアくどせき立れば一同は  
 立上りて銘々坐に付しに氣拔太は股引にさゝりたる針を  
 恐て一番跡にて席に至りしに幸ひ椅子は皆塞たればぼん  
 「もう椅子がありやせんから私は立て戴きやせう主人「い、

エお掛あさらないではいけません椅子の幾許でもあり升  
 早く椅子を持てさあど聲掛れば下婢の奥より忽地持來り  
 て氣拔太の傍に置其儘奥へ行にけりぼん「お掛ひくださる  
 ち却て此方が勝手に坐いやす主人「い、エ少しもお掛ひ  
 申しの致しませんサア爰へお掛なさいズツトこちらへおよ  
 りなさいさあ直にお掛なさい此時氣拔太のモジクして  
 居されバ主人の遠慮すると思ひて肩に手を掛無理に腰を  
 掛さすれば氣拔太の大聲にてア、イタ、ア、イタ、と顔と  
 まかむるにぞ主人は膽をつぶし何も椅子の上にあらう譯  
 はなしどうあさいましたぼん捨て置てくゞさいア、イタ、



「ア、イタ、いと苦しき顔色にて人の近づくを嫌いたり斯く  
 て婿の此体を見るより氣拔太の後に廻り抱起していふや  
 う婿なせお掛さる度毎に苦しい聲をお出しですといひ  
 つ、氣拔太の上衣をまくりて股引の尻を見れば長さ針が  
 さ、りて糸もぶらさがりてゐたれば思はず吹出したるを  
 主人の立寄り靜に其針を振取て「ヤ、くこんお針がさ、  
 つていたもの嘸痛は坐いましたらう婿さんの何をそんな  
 にお笑ひだへ婿ご免ささい股引の事が餘りお笑ひから竟  
 笑ひ出しましたよ主人もうそんな事いはずにサアお膳へ  
 お付ください氣拔太さんも遠慮なしにサアくお掛く

ださいといはれて氣拔太の少し安心したれを婿の方へ  
 向ざりけり婿の又折れ氣拔太を見て吹出せしかば近くの  
 人々の何事かと婿に問掛るに婿の笑ひあがら左様ささう  
 お尋なら申しませうが今晚のお笑ひ草といふの外でも  
 い一ツの股引を三人で用ひたと申す大笑ひのお断さど  
 より氣拔太の立上りいくらでも悪くおいひさせへ  
 分御馳走になりやしよからお暇といた  
 挨拶もせずこそくと二階を降りて

第五回

午前五時過とも覺しく夜も明わさ



掃除してゐるに氣拔太の歸  
れ言葉も交すして早くも家の内  
齒醫師の部屋にて何やら騒敷争ひ叫  
ひ聞て立止り暫時手を組窺ひしに腹の  
晚いたづらして門札を掛替るより事起  
此舉動を聞るより斯て隣家の桶屋にて  
産月なりしに俄に出氣づき腹の痛に  
待て亭主に向ひ妻私しや腹が疼、こ  
にも生る、かも知れませぬ早く産婆を  
くどせき立れば亭主の周章で飛出し隣  
家に至りて門番

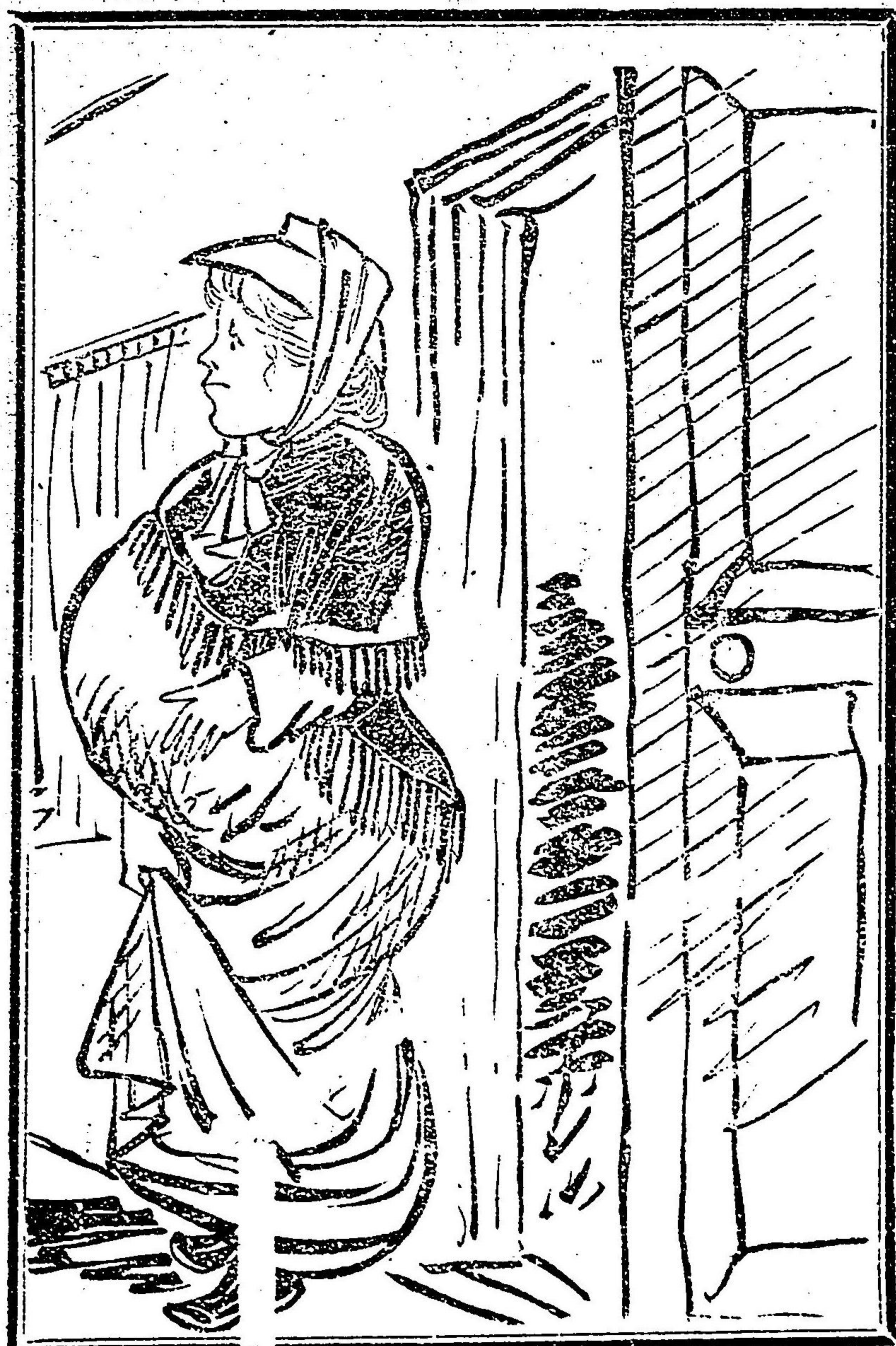
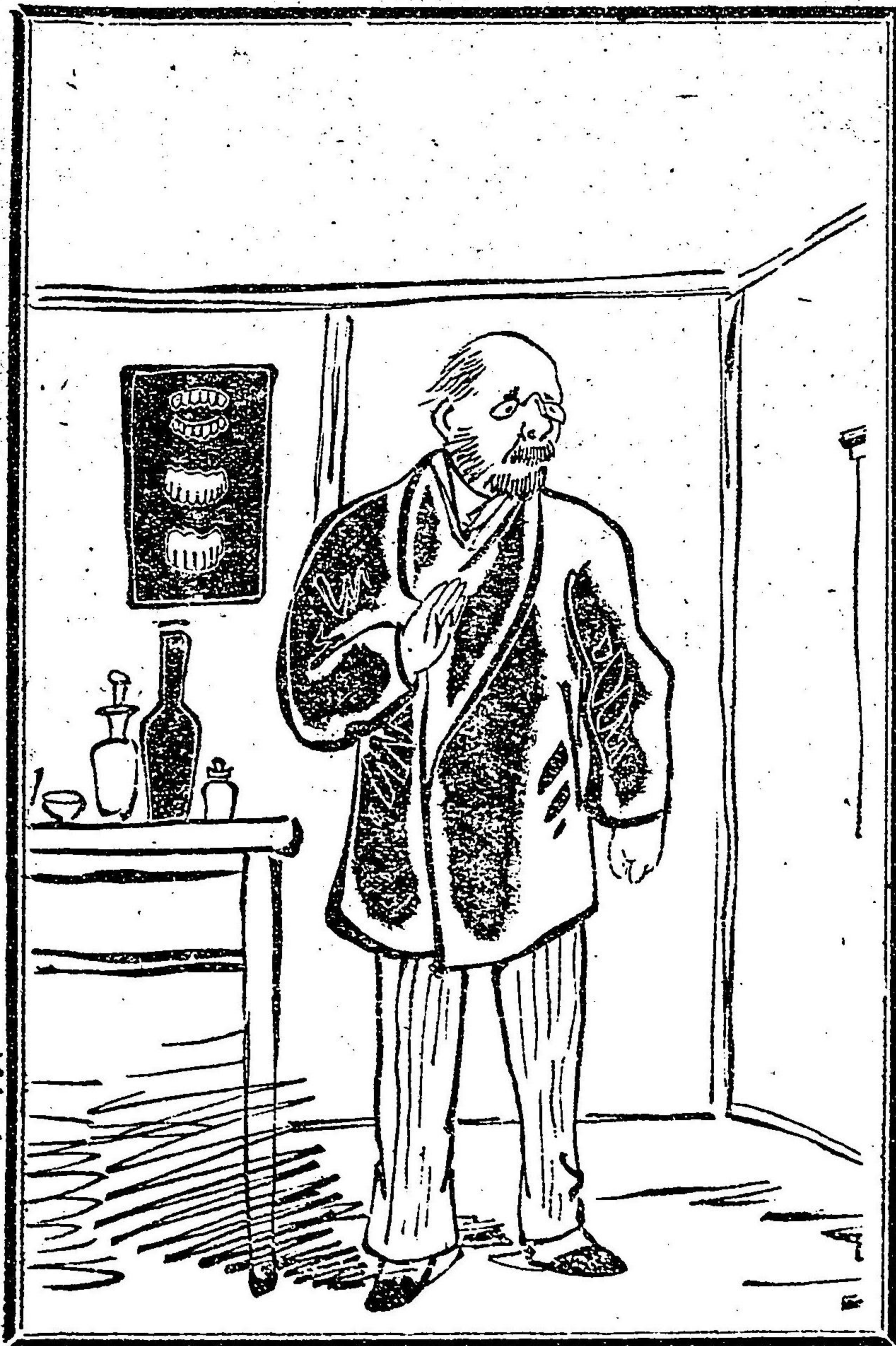
に問けるやう桶屋此内に産婆が居るさうですが誰ぞ案内  
でもする人がおり升か門番で勝手にお這入るさい皆んち  
門口に札が掛けて居り升と聞より桶屋の内に入り見ると部  
屋の入口に産婆の二字が記してあればあいたしく戸を  
さ、さ呼立るにぞ齒醫師の驚き眼を覺し寐卷の儘にて戸  
を開き齒醫何の事か騒々しい私の火事でも始つたかと思  
ひました何を急用でもあるのですか桶屋急にお頼申した  
い事があり升が時にあなたに先生で御坐いやすか齒醫左  
様さ私です桶屋人から聞きましたに女と申事ですが齒醫  
「夫の人が虚言を云たのでせう桶屋そりやア女でも男でも



構かまません上手じょうずでさへあればいひのです 齒醫しやくい「ご安心あんしんなさ  
 私わたくしの手際てぎわい誰だれも知らぬ者ものありません直なにも治なほて上あます  
 まあ些せこちらへお這入はいりあさい 桶屋かづや夫おつとに及およびませんから直な  
 に支度しだをあされて私わたくしと一所いしょにお出いください 齒醫しやくい「ア、それ  
 ぢやアあなふでいひのですかといふを聞きて桶屋かづやの吹出ふきだ  
 じ 桶屋かづや「あなたハ戯言ひやうご者ものですなへ 齒醫しやくい「それぢやア雄おとこですか  
 桶屋かづや「私の女房にようぼうです、昨晚きのうから惱なやんで居ゐりやと 齒醫しやくい「さうです  
 かるらふちら愛あいへ連つれてお出いなさい直なに扱あて上あげ桶屋かづや「迎むかへ  
 連つて來きる譯わけにないさやせんかち宅たくへお出いなすつて扱あてく  
 させへ 齒醫しやくい「久敷くしくお痛いたでぞか 桶屋かづや「左様さやうさ九箇くわん月げつの世間せけん並ならで

左程さほど痛いた事こともありやせんが今いま月げつの丁度ちょうど臨りん月げつ故ゆゑ其處そこで痛出いたし  
 たと見みへやすのさ 齒醫しやくい「是これはしたり腐敗くさた様ようあものを九箇くわん  
 月げつも捨すて置おきあさるとい 桶屋かづや「何をいひあさる私わたくしが何なにし  
 に腐敗くさ物ものを作つくりやせう 齒醫しやくい「私わたくしにあなたがいふ事ことがちつ  
 とも分わかりませんが兎うも角かくも着物きものを着換きかてお宅たくへ出いませう  
 桶屋かづや「直なにお出いくだせへ 齒醫しやくい「時に前齒まへばですか奥齒おくばですか 桶  
 屋かづや「何なにとおいひあさる男おとこの子こか女おんなの子このお尋たづか夫おつとは前まへから  
 分わかるものですか 齒醫しやくい「私は男おとこだの女おんなだのお尋たづか致いたしません  
 細君こまぎみのお扱あちさる齒はの何齒なにばかとお問申とますのさ 桶屋かづや「齒はとい  
 何なにの事ことです到底つまり子こ供どもが満足まんじくに生まれさへすりやアいひので







す齒醫「そんならお産の事でお出なすつたのか馬鹿々々し  
い私は齒醫師で産科は致しません桶屋「そんならあせ門口へ  
産婆といふ札を掛けてお置なせいやす齒醫「そんな札は掛た  
事ありません桶屋「何で私が虚をつきやせう齒醫「此人の  
マア眼を能洗つてお出あさい今曉から何のこつてすもし  
札に産婆と書てあければ齒を抜換りに鼻を捻切ますせ桶  
屋「鼻ぐらゐろか首でもよいからサア出てお見あさいと  
互の争ひ騒敷ければ戸外に亘たる氣抜太の腹と抱へて笑  
ひしに折節聞はしく入来る人のありければ誰やらんと見  
歸るに丸き帽子を冠たる年三十五六ばかりの婦人左の頬

を押へあがら階子を昇りて三階に行齒醫師と記したる標  
札の前に亘て鈴を頻に鳴しけり此時氣抜太も跡より三階  
にいたり産婆が部屋の脇に隠て様子如何にと窺しに彼婦  
人の餘り痛や強かりけん會釋もなく戸を開きて内に入産  
婆を見ていふやう婦人「おばあさんア、痛々々昨晚から  
つども寐せんとふぞ早く療治をしてください産婆「  
見た所でい餘り大きくもありませんが初めていすかも一  
度おあんなあすつたのかへ婦人「ハイもう五度も扱ました産  
婆「お扱あすつたとへ大抵無理に扱ものでいありません静  
に出ささいぢやアいけません婦人「そんなら痛くないやう



にしておくれですか 産婆「どうかさうしよいのと思ひ舛  
 よ 婦人「何しろ少しも早くお頼申舛 産婆「今直に支度を致し  
 升よといひつゝ、奥に入しに彼婦人の椅子に掛り口を開き  
 て待たるを産婆の立出でこの体を見て不思議に思ひ合せ  
 そんるに口を開くのでそそれに椅子の上でいけません  
 ろら 寐臺の上へ横におなりなさい 婦人「私に今迄幾度も扱  
 て貰ひましたが無臺の上の今日が始めていす定めし流儀  
 違ひでせう 産婆「イエ、誰も同ト事ですそんなに口を開  
 ていけません 婦人「そんなら何處から出すのです 産婆「夫  
 りあなたも始めていし御存ぞでせう、ア平におありな

さいその様に縮でいけません成丈口を閉で今に意氣む  
 のですよ 婦人「あんとおばアさんの人を馬鹿にあさるのか  
 へこんる形をしあいでもいひぢやアありませんか口と開  
 ず歯が抜るものです 産婆「何ですと歯と抜どいひの  
 か先刻から二時間もお嘸し申そにどふもお笑と思つてゐ  
 ました 婦人「見てくゞさいッラ奥から二番目の黒くなつて  
 なるのさ分ましたか 産婆「實に馬鹿々々しい歯が痛どて今  
 曉から起されて騒がれぢやア困るぢやアありませんか此  
 産婆が何から歯抜にありましたへ 婦人「わたしやこちらの  
 看板を見て來ましのさ 産婆「お前さんまだ眼が覺ないの



でせう寐ぼけちやアいけません齒醫師の一番下の部屋に  
 居升よ婦人「わたしや昨晚から寐なかつたから寐ぼける譯  
 もあし儘に門口に齒醫師と記してあるものを産婆そんな  
 事ありませんそりやア讀違へでせう婦人「馬鹿をかいひ  
 であい讀違ひしませんよ兎も角門口へ出て御覽さうして  
 門番を呼で見ませう産婆ア、何處へでも行て見ませうと  
 此二人が争ひを聞きより氣拔太の腹を抱へて己が部屋にぞ  
 戻りけり斯て下坐敷に齒醫師との争ひあり爰に産婆  
 どの處ありて何れも門口に出たるに標札が違たれば産婆  
 齒醫師も不思議に思ひ門番を呼付て問けれども更に知

れざれば、あうしての置れぬと頻に吟味を始めしに何事な  
 らんと野呂吉と甚六も來りしが氣拔太の部屋に籠りて笑  
 ひしかば彌氣拔太の仕業なる事と分り野呂吉甚六も共に  
 詫入て中裁も濟跡の大笑ひとぞありにける

西洋滑稽 三笑人 終



明治十二年五月一日版權免許

譯者及出版人

士族

山

田

保

東京南鍋町  
二丁目二番地

定價貳拾五錢

東	日本橋通三丁目	九屋善七
京	芝三島町十番地	和泉屋市兵衛
發	馬喰町二丁目	森屋治兵衛
賣	芝柴井町十六番地	土屋忠兵衛
所	尾張町二丁目一番地	津田源七
	表神保町七番地	大黒屋金之助
	南鍋町二丁目	仁契堂



17

18





東 京 圖 書 館

新 書 門

七 部

三 類

二 函

一 〇 架

號

冊